

現代日本社会の自死について考える 秋葉原事件を中心に

大橋奈緒美 和光大学研究生

——はじめに

自死問題は個人的問題ではなく社会的問題である。とくに若者の自殺者数は依然増える一方である。若者の自殺の原因をさぐることで、日本社会全体が抱える問題がみえてくる。それは「孤立」の恐怖であった。

現代の自殺研究は、一般的に心理・生物学的なものが主流となっているが、あえて人文学的見地から考察していきたい。それは現代日本社会における「自死」の内在的要因、本質的意味をあきらかにしていくためである。

また本稿の題目で、「自殺」ではなく「自死」という言葉をつかったのは、「自殺」とは似つかわない「自らの死」もあるからだ。「自殺」はどこか宗教的罪悪や病理的兆候などのあまりよくないイメージを連想させる。「自死」は「自殺」の同義語であるが、「意思的な死を非道徳的・反社会的行為と責めないでいう語」(『デジタル大辞泉』)というような意味である¹⁾。つまり「自死」という言葉を用いるのは多様な「自らの死」を視野に入れて論じたいからである。

1 —— 現代日本社会の自殺

1-1 一般的な要因

NPO 法人「自殺対策支援センター ライフリンク」によると²⁾、日本の自殺実態は以下のとおりである。1998 年から 14 年連続で「年間自殺者 3 万人超」(一日約 90 人)。これは交通事故死者の 6~7 倍(東京都においては 13 倍)にあたる。

1) モーリス・パンゲ／竹内信夫・訳『自死の日本史』(2011) 講談社学術文庫 p.5 より

2) 2012 年 2 月 13 日(月)に東京都練馬区練馬公民館にて行われた人権トーク『自殺のない「生き心地のよい社会」へ』にて配布された資料より

自殺率はアメリカの2倍、イギリスやイタリアの3倍である。そのうち40～60代の男性が全体の4割を占める。働きざかりの父親層である。20代、30代の自殺率は20年前の1.5倍で、死因の第一位が自殺である。80歳以上の自殺率は31.4%（全世代平均の25.3%よりも高い）で男女比は7対3である。自殺率の国際比較は、男7位、女2位である。

内閣府が2012年5月2日に発表した自殺に関する成人の意識調査の結果では、「自殺したいと思ったことがある」と答えた人は23.4%に達し、2008年の前回調査より4.3ポイント上昇した。年齢別にみると、50代以下は4人に1人が自殺を考えた経験をもっており、20代は28.4%と最も多かった³⁾。一般的に考えられている現代日本の自殺の原因は以下のものである。

1998年3月に自殺者数が前年に比し8,400人増加した。1998年3月は1997年度の決算期である。1997年11月に、三洋証券や北海道拓殖銀行が経営破綻に陥り、山一証券が自主廃業に追いやられた。その年度末の決算期に完全失業率が初めて4%台に乗る。倒産件数も急増。そうやって経済状況の悪化に引きずられるようにして自殺が急増したと一般的にいわれている。

NPO法人「自殺対策支援センター ライフリンク」によると、自殺は次のような要因が重なって起きているという。第一に過労、事業不振、職場環境の変化、第二に身体疾患、職場の人間関係、失業、負債、第三に家族の不和、生活苦、うつ病。それらが連鎖するように重なり、自殺につながるのだそう。

しかし筆者は、もっと根本的な「何か」が失われたが故に自殺が増加したのではないかと考える。

1-2 自殺者数減少と若者の自殺者数増加

2012年の年間自殺者数が、15年ぶりに3万人を下回った。日本経済新聞(2013年1月18日日刊)「自殺者をなくす——年間なお2万7千人(上)」では、「借金や生活苦などによる自殺が減ったとみられ、専門家は多重債務者対策などが一定の効果を上げたとする。ただ「予備軍」は依然多い。若者では増加傾向で」あるとしている。また同紙(2013年1月23日日刊)「自殺者をなくす——年間なお2万7千人(下)」によると、「自殺者数は昨年(※原文ママ)まで3年連続で減ったが若者に限ると増加傾向にある。昨年1～11月の月ごとの暫定値を合計すると、20代以下の自殺者は3,136人。年間自殺者数が同じく3万人以下だった1997年の通年(3,003人)を既に上回った。この間の少子化で、20代以下の人口は1千万人以上減っており、自殺率はさらに高まっている」。若者の自殺は、いじめや就職活動の失敗で増加しているという。いじめが以前に比べて陰湿化していて、それには子供たちに急速に広まった携帯電話が背景にある。「裸の

3) 日本経済新聞(2012.5.2.日刊)

写真をインターネットに流すぞ」と脅された中学生もいる。「メールの返事が来ないだけでイライラして死にたくなります」など、対人関係の難しさも若者を追いつめている。

渋井哲也「(ルポ ニッポンの現実) 増加する『若者の自殺』」⁴⁾によれば、現代日本の自殺者数は人口動態統計によると、1958年前後と85年前後、98年以降の14年間という三つのピークがある。第一のピークは58年前後で、20～24歳では84.1(人口10万人比)だ。急増の理由は覚せい剤の蔓延もあったが、「戦後の価値観の大転換が起き、教科書を墨で塗った世代」と、自殺予防総合対策センターの松本俊彦(自殺実態分析室長)は話す。しかし、近年の若者の自殺増加の背景については、「2000年以降、若者の生活パターンも変わった。以前より精神科にアクセスしているが、これまでの患者像とは違っている。決定的な理由はわからない」と話す。この記事の筆者でフリージャーナリストの渋井は、「90年代から若者の自殺願望を取材してきたが、『良い学校、良い就職、良い家庭』といった方程式が崩れたことが大きいと感じる」⁵⁾と述べている。

現代日本社会の自殺は若者層の自殺者数が多いことが特徴である。若者の自殺の原因をさぐることで、現代日本の自死について考えたい。またそれは同時に、現代日本社会全体が抱える闇にメスをいれることでもある。

2——秋葉原事件からみえるもの

2-1 四度目の自殺行為としての事件

2008年6月8日午後12時33分に起きた「秋葉原無差別殺傷事件」は、死者7人、負傷者10人を出した。犯人は当時、自動車製造工場に勤める25歳の派遣労働者だった加藤智大である。

事件前の2006年8月、2007年9月、同年11月、加藤は自殺しようとしていた。彼には強い自殺願望があり、自殺行為を繰り返していた。彼の自殺行為はすべて未遂で終わっているが、無差別殺傷事件を起こした。彼にとって「殺人も自殺も事件であり、全く一緒」⁶⁾であった。つまり秋葉原事件は、彼の自殺未遂の延長線上にある。「秋葉原事件は、四番目の自殺というふうに考えた方がいいような気がします」⁷⁾と高岡健はいつている。この事件はつまり、彼の三度の自殺未遂と地続きになった四度目の自殺行為としての無差別殺傷事件である。その彼の自殺願望やその周辺を研究することにより、現代日本社会の自殺の一因と特徴がみえてくる。

4) 『潮』11月号 第657号 潮出版社(2013.11.1.)

5) 注4) pp.172-173

6) 加藤 2013:174

7) 芹沢俊介・高岡健(2011)『「孤独」から考える秋葉原無差別殺傷事件』批評社 p.85

「無差別殺傷事件の犯人」または「殺人者」という事実は消えないが、現代の一若者の孤立感や喪失感などが、事件後に出版した『解』および『解+——秋葉原無差別殺傷事件の意味とそこから見えてくる真の事件対策』（以下、『解+』とする）から読み取れる。彼が自分の考えをまとめた書籍はもちろんのこと、彼が事件前から掲示板に投稿していた書き込みも、芹沢俊介によれば「事件を解明するための第一級の資料」⁸⁾である。

このように秋葉原事件を自殺行為の一種ととらえ、かつ本人がまだ生きていて、彼の言葉と資料がそろっていることから、秋葉原事件について考えることが現代日本社会の自死についての研究として成立するのである。

2-2 「孤立」がもたらす「社会的な死」

当初、事件の動機は仕事や私生活への不満が原因だったとされていた⁹⁾が、加藤によると事件は、インターネットの掲示板でのトラブルによる、匿名の不特定多数からの「攻撃」に対して心理的攻撃を与えるための「手段」にすぎなかった。

彼の三度の自殺未遂は、およそ（彼の主観による）社会との接点がないことによる孤立が原因だった。孤立が自殺願望につながり、孤立が解消できないなら自殺するしかない、のである。これが現代日本社会における若者の自殺の一因の特徴である。彼の孤立への恐怖が、インターネットの掲示板への依存につながり、またそれが事件にもつながった。彼は事件の原因には、「掲示板に依存していたこと、掲示板でのトラブル、そして、トラブル時の（私の）ものの考え方の3つがある」と自己分析し、実際に2010年7月27日の公判でもそのように供述したが、その真意が検察官や裁判官に伝わった感触はなかった¹⁰⁾。彼は「たかが」掲示板と理解され、その真意が伝わらなかったことに対して、もっと丁寧な説明が必要だったとした。『解』で補足された説明は以下である。

では、依存でなくて、どのように説明するのかといえば、全ての空白を掲示板で埋めてしまうような使い方をしていた、と説明します。空白とは、孤立している時間です。孤立とは、社会との接点を失う、社会的な死のことです。社会との接点とは、自分の行動理由になる相手のことです。私にとって孤立は恐怖であるため、それを埋めなくてはいけないところ、掲示板はとても楽だったので、手抜きをして、全て掲示板で埋めてしまっていた、という

8) 注7) p.6

9) 中島岳志 (2011)『秋葉原事件 加藤智大の軌跡』朝日出版社による

10) 「判決において裁判官は、ネット上の荒らし、なりすましの問題とつなぎ（※労働者）がなくなっていたという事件の二つを主な要因に取り上げて判決を書いた」（芹沢・高岡 2011:117）。また女性検察官は、不細工という容貌自体が事件の伏線になっているという容貌説ないし不細工説にこだわった。高岡はこれに対し「彼女を含めて検察はこの事件の本質がわからなかったので、わかりやすそうなものを出してきたとは思えない」といっている（芹沢・高岡 2011:118 - 119）

話なのですが（後略）¹¹⁾。

彼は「孤立」を「空白」と表現している。「何もない」空間および時間をひとりで過ごすことができないのは現代日本人の特徴である¹²⁾。またそれを恐怖に感じるのである。

彼は、地元を離れ、仕事を転々とすることで、友人や同僚との付き合いをなくしていた。必然的にひとりの時間が増えると、「それは、世の中からたったひとり、取り残されたかのような感覚」¹³⁾であった。加藤は離れた地元で友人がいたが、「一緒にいる時間の長さが長い人ほど親しく感じ」¹⁴⁾た。そして一緒にいても、自分の中に相手はいても、相手の中には自分がいけないような感覚をもった。物理的には時間や場所を共にしても、精神的にはそれらを共有できていないのだ。相手との同化を求めたが、同化することはできなかった。ひとりの時間が増え、掲示板にアクセスする頻度が高まると、すぐに返信（「レス」）を返してくれる掲示板の友人の方が現実感を増し、「いつも一緒にいてくれる掲示板の友人とて、優先順位が入れ替わってしま」¹⁵⁾った。つまり物理的には一緒にいなくても、レスポンスをくれるということが彼にとっての「一緒にいる」ということで、それが彼の求める「友達」のあり方になっていた。彼は「友達」に常に「レスポンス」を求めている。

現代日本人、特に若者の特徴として、「常にログイン状態」という心理状態があげられる。他者の存在を感じつづけるため、また他者に自己を認識しつづけてもらうために、時間を共有しつづけ、いつでも連絡のとりあえる状態にし、「レス」をしあう。切れることのない対人関係は、どこにいても「一緒」である。

加藤の生活は掲示板中心になっていった。彼は掲示板で度々トラブルを起こしたが、それが原因で掲示板を去ると、再び空白の時間ができ、孤立の恐怖におび

11) 加藤 2012:12

12) 現代日本人は「何もしない」ことにこそ難しさを覚えている。例えば電車の中でも——通勤・通学に疲れているならなおさら——「何もしなくて」いいはずだ。だが疲れていればこそ、落ち着いてはいられない。「暇つぶし」に携帯電話をいじったりするのだから、本当に疲れを癒すことはできない。現代日本人はじっとしていること、つまり「何もしない」ことが苦手なのである。お茶をすることひとつとっても、ただお茶の深みや香りを楽しむということとはできない。おしゃべりを楽しむなら結構だが、東京のカフェでは、昨今インターネットが無線につながったこともあり、ノートパソコンを相手にしんどそうな顔をしたサラリーマンが多い。そんな彼らの表情は決して満足げとはいえないだろう。反対に、「何もしない」のできるのが江戸時代に生きる日本人の特徴である。「何をするということでもない、何もしてない人々、その数は日本ではかなり多いのだが、そんな人達は火鉢の周りにうずくまって、お茶を飲み、小さなキセルを吸い、彼らの表情ゆたかな顔にはっきりと現れている満足げな様子で、話をしたり聞いたりしながら、長い時間を過ごすのである」（渡辺 2005:237）。

13) 加藤 2012:16

14) 加藤 2012:17

15) 加藤 2012:17

えた。そうして彼の頭に自殺が思い浮かぶようになる。「孤立」という「社会的な死」が現実の「生」を危ぶむのである。

1-1において、昨今の自殺の主な原因は経済的な理由が一般的であったと述べた。しかし1998年から14年間つづいた年間自殺者数3万人も2013年には3万人を下回り、総体的に自殺者数が減る中で、依然増えている若者の自殺の原因として、現実的に人の生死を判断する肉体的理由ないし経済的理由のほかに、このような内在的要因があげられる。うつ病のような精神疾患も内在的要因のひとつに区分されがちだが、この内在的要因は、現代日本社会そのものがもつ価値観がもたらす現代日本人のものの考え方によるといえる。

また、加藤にとって現実的な「生死」より社会的な「生死」のほうが重要であった。それは彼が肉体的に生きていること以上に、どのように生きるかを重視していたことを示す。つまり彼の望む社会的によい生以外は死である。彼にとっての「孤立」が「社会的な死」であって、それが実際の「死」へつながっていくように、彼にとっての「生」も「社会的生」である。このように社会的に生きて死んでいくというのが現代日本人、特に若者の死生観である。

加藤は次のようにいっている。

自殺をしようとすることで社会との接点を作ることができることになります。つまり、この自殺は、孤立から逃げるための自殺であると同時に、孤立から逃れるための自殺を避けるために孤立を解消するための自殺でもあるということです。外野からは、結局死ぬのなら意味が無いのでは、とされるところですが、私にとっては、自分が死ぬとか死なないとかという話はどうでもいいことで、自分が孤立しているか否かが全てでした¹⁶⁾。

「社会的死」から逃れるために「肉体的死」を選ぶのだ。

2-3 「手段」としての事件、そして死

加藤が三度自殺しようとして未遂に終わったのは、現実世界の他者との接点が生じたからであった。彼は2006年8月の最初の自殺未遂で、自殺を試みる前に、複数の地元の友人にメールで自殺を予告していた。なぜそのようなメールを送ったのかは、「(私と)一緒にいてくれない、という彼らの間違っただけな考え方を改めさせるために彼らに心理的に痛みを与えるための自殺であり、他の人には事故にしか見えなくても、彼らにはそれが自殺だということも、その理由も理解できる」¹⁷⁾ためであった。つまり「今回の自殺は、昔からの友人に対してのメッセージでの

16) 加藤 2012:27

17) 加藤 2012:27

(※原文ママ。としての、か。)自殺でもあ」った¹⁸⁾。

加藤にとって自殺も無差別殺傷事件も、それらは「手段」である。他者の間違った考え方を改めさせるための一方法である。これは後述する彼のものの考え方による。

彼は車でトラックに突っ込むつもりだったが、縁石に車をぶつけ、自走不能になってしまった。自殺方法も宣言していたため、予告した方法以外では自殺できなかった。彼は、車をレッカーで運んでもらい、その車の修理会社にいることで、社会との接点をもったという。修理不能の車を置かせてもらっていることに悪気を感じ、その迷惑を解消するというのが彼の新しい行動理由になった。

2007年9月の二度目の自殺未遂では、掲示板で知り合った19歳(と思い込んでいて、実際は18歳だった。このことが次の自殺未遂につながる)の少女から「ハタチになったら遊びに行くから」¹⁹⁾というメールを受け取り、その少女の誕生日が半年後なので、自殺を思いとどまっている。

同年11月、彼は電車で飛び込もうとするが先に人身事故が起こったために、三度目の自殺行為を諦めた。駐車場に止めた車の中でずっと寝ていれば死ぬるかもしれないと考えた。しばらく(※加藤の記述による)時間が経つと、駐車場の管理人が警察官を連れてきた。加藤は警察官に何をしているのかと問われると、「久しぶりの人との会話に涙があふれ」²⁰⁾た。自殺しようとしていると率直に答えると、「生きていればいいこともある」²¹⁾と声を掛けられた。しかし喜びも束の間、加藤は絶望したという。なぜならそれは彼にとっては、「(俺は何もしてやらないけど)生きていればいいこともある(だろうから、ひとりで勝手に頑張れ)」²²⁾ということだからである。

これもまた前述した「常にログイン状態」の心理による。彼は自分の自殺についても他者との共有を求めた。彼にとっての自殺とは孤立から逃れる手段であり、彼の自殺行為は他者からの「レス」を求めた「投稿」である。

しかし絶望している彼に、駐車場の管理人が、とりあえず車を出すように、そして駐車料金を求めてきた。彼がお金が無いというと、管理人は年末まで待つと答えた。彼は「その瞬間、(私は)生きなくてはいけなくな」²³⁾ったと感じた。金銭的な問題ではなく、彼を信用してくれた管理人のために、年末までに駐車料金を返済するという約束を果たすためである。「その約束がある限り、孤独になっても絶対に孤立はしません」²⁴⁾。彼にとって「約束」とは、人に求められるこ

18) 加藤 2012:27

19) 加藤 2012:37

20) 加藤 2012:41

21) 加藤 2012:41

22) 加藤 2012:41

23) 加藤 2012:41

24) 加藤 2012:41

とであり、生きる理由であった。

加藤は自殺行為寸前の際に関わった他者の「生の」言葉に動かされている。そして、その「声」がなくなった後は、掲示板上の「声なき声」に期待した。彼の生死にかんして、インターネットの「声」よりも「肉声」のほうが彼を動かした点は重要である。しかし彼は生身の友人や同僚がいたが、ネット上の不特定多数の「誰か」を求めた。それは「孤立」がそうさせた。彼は幼少期からの母親の暴力的な教育のもとで、自分の意思を言葉で表現しなくなった。黙って相手の意思を読み取り、それに従う能力を身に着けた。しかし時折、納得いかないことが起こると、突然キレて、暴力で訴えた。それは相手の間違った考え方を改めさせる「手段」だった。この「手段」は今日という「空気をよむ／よませる」コミュニケーション方法である。

彼は似たような事件が起こらないためには、社会との接点を確保しておくことが必要だといっている。似たような事件とは、いわゆる「無差別殺傷事件」ではなく、「一線を越えた手段で相手に痛みを与え、その痛みで相手の間違った考え方を改めさせようとする事件」²⁵⁾である。「社会との接点を確保しておくことで思いとどまる理由も確保しておき、そこに逃げられるようにしておくこと」²⁶⁾が、彼の考える「手段」としての事件を防ぐ対策である。また『解+』では、「懲役よりも死刑のほうが、かなりマシ」²⁷⁾と語っている。「その背景には、孤立への恐怖があります。繰り返しますが、私は死にたかったのでも死刑になりたかったのでもありません。刑務所で地獄を見た後に孤立している世の中に放り出されるくらいなら死刑の方がマシ、というだけのこと」²⁸⁾である。つまり「死」よりも「孤立」のほうがたえがたかったのである。

加藤にとって自殺や殺人が「手段」であったということは、彼にとっては自殺や殺人が「目的」ではないということである。つまり、自殺や殺人の先に求めているものがあつたのである。

加藤は「懲役を回避するために死刑になる事件を起こしました」²⁹⁾といっている。そして死刑がなく最高刑として懲役が科されるのならば、無差別に人を殺傷する意味もなく、さしずめ「レンタカーのトラックを返した後、おそらく、自殺に向かい始めたはず」³⁰⁾であつたという。彼に必要なだったのは「自分自身の死」であつた。しかし彼にとっては「死」も「手段」である。

加藤は死ぬことが怖くないという。「一般に、死ぬことは怖いこととされています。それが私にはわかりません。死ぬことも寝ることも同じです。起きるから

25) 加藤 2012:150

26) 加藤 2012:152

27) 加藤 2012:110

28) 加藤 2012:110

29) 加藤 2013:137

30) 加藤 2013:137

寝ていたことに気づくだけです。寝ることが怖くない人がどうして死ぬことが怖くないのか、理解不能です」³¹⁾。「死んだ方が楽」とはよくいう言葉であるが、生きていることの方が死ぬことより苦しいのだ。2-2 で前述したように、「社会的死」が彼にとっては「死」であり、生きている器に入っているけど、中身は死んでいるような状態だった。そのような矛盾した生死状態に彼は引き裂かれていた。「肉体的死」は「社会的死」から逃れる唯一の方法なのだ。そのような意味では、彼にとっても「死」は絶大な力をもっていた。加藤はいう。「自分が思い通りにならないことから離れてしまう手段について、自殺があげられます。死んでしまえば、あらゆることと一切関わらずに済むようになります」³²⁾。「逆に、思い通りにならないことを自分から遠ざける手段については、殺人があげられます。相手を殺してしまえば、その相手がいることで生じる問題とは一切関わらずに済むようになります」³³⁾。自殺も殺人も問題解決のための究極の「手段」であり、その先には問題を解決して「思い通りに生きたい」という願望がある。「社会的死」を回避するために、「肉体的死」という「手段」を使って、「社会的生」を獲得する。彼の「死」は「生」の反動である。彼は決して「死にた」かったのではなく、「生きた」かったのではないか。この点については、高岡も「非常に逆説的な現象だと言わざるを得ませんが、自殺未遂の中にこそ、彼の生の欲動があるのではないか」³⁴⁾ といっている。

渋井の取材³⁵⁾でも自殺願望をもつ若者が非常に多いことがわかる。雄治（仮名・47）は、自殺した親しい後輩について「彼は人一倍頑張り屋で、助けを求めることは他人に迷惑が及ぶと考えるタイプ。苦しみながら生きるより死んだ方がマシとも考えていた」という。優奈（仮名・18）は高校一年の秋、市販されている風邪薬を大量に飲んだ。「この量では死ねないだろうとは思っていた。自分が辛いことを気づいてほしかった」。小学生の頃から、手の甲をはさみで切ることがあったが、そのときも些細な喧嘩がきっかけだった。しかし「死にたいわけじゃなかった」。

高岡が『『孤独』から考える無差別殺傷事件』の中で、フロイトのアインシュタインとの書簡における「生命体は外部を破壊することで自己の生命を維持する」³⁶⁾という発言を紹介している。これを展開すれば、「自己ないし他者の肉体を傷つけることで、自己の内面を維持する」といえるだろう。つまり現代日本の若者たちにとって、リストカットや自殺行為、またいじめや殺人という死にさえ

31) 加藤 2013:68

32) 加藤 2013:44

33) 加藤 2013:44

34) 芹沢・高岡 2011:86

35) 『潮』 11月号 第657号 潮出版社（2013.11.1.）、「(ルポ ニッポンの現実) 増加する「若者の自殺」より

36) 芹沢・高岡 2011:38

もつながる「破壊」は自己の生命を維持するための「手段」なのだ。

2-4 「誰か」を求めて—「遠くのリアル」より「近くのネット」

加藤は「社会との接点」を重要視し、「誰か」のために生きたいと考えていた。「誰か」に求められることが生きる理由になりえた。中島³⁷⁾によると、当初、加藤に彼女ができないことも事件の動機として考えられた。実際に彼は、掲示板上で不細工ゆえに彼女ができないことを自虐的にネタにして、笑いを取ろうとしていた。しかし『解』からは、彼女よりも「リアル」の世界での「友達」としての「誰か」を求めていたように考えられる。実際に『解+』では、「誰か」を探していた³⁸⁾ といっている。

彼は友人との適切な距離感が取れなかった。他者とコミュニケーションがうまくとれない原因は彼の家庭環境にある。家族との不和（特に母親に認められないこと）が彼の承認欲求を強くし、わかりあえる「誰か」を求めつづかせた。この事件は、人間は社会においてもひとりきりでは生きていけないことを証明している。そして求めている「誰か」とは、遠い存在の誰でもいい「誰か」ではなく、根本的な人間関係の中にある。

加藤は掲示板での書き込み³⁹⁾ でたびたび「友達がいらない」、「彼女がいらない」という旨を書いている。これは明瞭で具体的な「孤独」の表現だが、彼のいう「孤立」は——検察官や裁判官にも伝わりづらかった、もっと複雑で根深い。芹沢も指摘しているが、やはり加藤と彼の母親の関係がネックになっているのである。彼の「孤立」とは、表面上には「誰か」、「彼女」、「友達」がいないと表出されているが、核心的には「内部の空洞化というか、一緒に誰かが内側にいない、内側が欠如しているという事態」⁴⁰⁾ である。本来なら備わっているはずのあるべきものの不在という空洞化状態が、彼が再三主張する「孤立」の根本にあるのだ。芹沢はこのことをわかりやすく以下のように述べている。

内部に空洞がないということは、いいかえれば内部に一緒に誰かがしっかりと入っているということであり、その誰かは信頼の対象である他者、最初の他者である母親なのではないか。その最初の他者の関係を軸として、彼女という異性との関係を生み出していくこともできるし、友達という関係を生み出していくこともできるだろう。でも逆に、その中核部分の原形になる存在との関係が欠けていたならば、友達を作ることも異性とつき合うことも困

37) 注9) に同じ

38) 加藤 2013:121

39) 加藤による携帯サイトの掲示板への書き込み内容は、『ロスジェネ別冊 2008 秋葉原無差別テロ事件 「敵」は誰だったのか?』かもがわ出版(2008)を参照した

40) 芹沢・高岡 2011:21

難だったり、不可能だったりするのではないか⁴¹⁾。

つまり加藤にとっては彼女よりも友達、友達よりも家族、そして何より母親との絶対的な関係が必要だった。

彼は、「誰かのために何かをし、評価されなくては、生きていけない人」⁴²⁾であった。「評価が途切れると、急に不安になり（中略）自分がこの世に存在しているのか」⁴³⁾わからなくなる。自ら存在理由をみつけることができなかった。だから彼は「誰か」に「評価される」ことを求めつづけた。「誰か」からの「リアクション」を求めつづけた。そもそもは母親に評価されることが自分の存在理由であった。しかし母親からの絶対的な評価（≡愛情）が得られぬまま、その飽くなき「評価」への欲求はむしろ肥大していった。「評価される」こと自体が他者および社会との接し方になった。彼は常に「評価されるよう」自分をさしだし、空気を読み取り、他者との均衡を保っていた。彼は他者にばかり求め、自身は受動的である。というのも、本来注がれるべきだった母親の健全な愛情に飢え、彼はその代わりを求めつづけた。しかし自分自身はうまく他者とつき合えなかった。つまり自分が他者を評価したり、愛情を注ぐというまでには至らなかった。自分自身がまず「誰か」に「評価」されつづけなくてはならなかった。そして第三者は、母親の分までの「評価」を彼に与えなければならなかった。高岡は、第三者は「実力以上のものを期待されていました。言いかえれば、受けとめの不可能性ということです。そのために加藤智大はまさに生の欲動を狭めていくという結果に陥らざるをえなかった」⁴⁴⁾と述べている。

彼は『解』で「孤独」と「孤立」という言葉を意識的に使い分けている。「孤立」は、自分以外の他者が一緒に存在しているのに、自分だけが他者と切り離されてひとりであるということである。自分はここに存在するのに、相手の中にはいないということである。彼は他者を求めながらも、いつも「ズレ」を感じた。加藤にはそれは社会的「死」であり、たえられない恐怖であった。

洪井は、「生きづらさを抱えた若者たちの取材をしていると、ほとんどといっていいほど、家族をはじめとする人間関係に違和感を感じている人が多い」⁴⁵⁾といている。

若者たちは、外へ外へと「誰か」を求め、自分を満たしてくれる「何か」を探している。しかし、実際にはその「誰か」はすでに自分の中にいるべき人で、自分を満たしてくれる「何か」もすでに持ちあわせているはずだったものかもしれ

41) 芹沢・高岡 2011:21

42) 加藤 2013:70

43) 加藤 2013:70

44) 芹沢・高岡 2011:100 - 101

45) 注 4) p.174

ない。

2-5 「100か0か」の人生

加藤は母親から「失敗が許されない環境で育てられた」⁴⁶⁾。そして何か問題が起こった時には、「100%相手が悪いのか、100%自分が悪いのかの二択しか」⁴⁷⁾なかった。この「100か0か」、「黒か白か」の考え方が現代日本社会で自殺を引き起こす根本的な考え方である。現代日本人は、失敗が許されない人生の中で「よりよく生きる」ことを求められる。家庭、学校、仕事場、社会で失敗は許されず、常に「よく」生きなければならない。またそれは精神的なゆたかさという意味での「よさ」ではない。成績をよくし、偏差値の高い高校・大学へ進学し、大企業に就職する。そして高い給料をもらう。すべて数字であらわせる、「よさ」である。

我々はメディアによる誇大広告的な情報に翻弄されていないだろうか。様々なサクセス・ストーリー、カッコいい仕事、高収入、リゾートでのバカンス、美しい肉体、グルメ、美男・美女との恋愛など、これらの現代日本社会が作り出した既存の「よい人生」がすでにカーペットのように行く手に敷かれている。これら資本社会が作り出した「よい人生」にはお金が要る仕組みになっている。

現代日本社会は物質的にゆたかになりすぎてしまった。際限なくゆたかになりすぎてしまったので、人びとは最低限の暮らしでは満足しないし、最低限の暮らしでは生きていけないような仕組みになっている。江戸時代の庶民たちの「簡素な生活」とはまるでほど遠い。経済的な貧しさを比較すれば、現代日本のホームレスは、確実に江戸の庶民たちよりゆたかだ。だがその「ゆたかさ」はわれわれを満足させないし、幸福にはしてくれない。江戸文明の「ゆたかさ」⁴⁸⁾は経済的、物質的に「ゆたか」ではなくても、江戸の人びとを満足させ、幸せにさせた。ともすれば、現代日本人が不幸だと感じたり、そして自殺する原因は貧困にあるのではなく、満足感を得られないことではないか。当事者の暮らしぶりが満足を与えず、物足りなさを助長させるものではないのか。現代社会のメカニズムが、つまりが資本主義の社会が、欲望をあおり、お金をなくしては生きていけないようにしてしまった。そして我々もお金がなくては満足できないように飼い馴らされてしまった。富者が幸せで、貧者が不幸せという頑固な枠組みを当たり前のもの

46) 加藤 2012:31

47) 加藤 2012:64

48) 渡辺京二によれば江戸時代においては、「一般的に言って日本には貧民はほとんどいない。物質的生活にはほとんど金がかからないので、物乞いすらまさに悩むべき立場にないのである」(渡辺 2005:150)。「貧しくはあるが最低限度の満足は保障されてい」(渡辺 2005:125)て、「生活が容易で単純な国ではほとんどすべての者が貧しいが、悲惨なものは一人もない」(渡辺 2005:126)だった。当時の日本人は「無邪気で人なつこく、そして善良だった。好奇心にとみ、生き生きとしていた」(渡辺 2005:154)。「当時の欧米人にとって、日本は彼らの到達した物質文明の基準からみて『ゆたか』だったのではない。それは次元の異なる『ゆたかさ』で」(渡辺 2005:124)あった。

にってしまったし、生活の営みもそれに倣わされている。そして物質的貧しさは、つまり精神的貧しさにつながってしまったのだ。江戸社会はただ貨幣経済が未発達なだけともいえるが、つまり我々は貨幣経済に頼らなくても「ゆたかな」暮らしができていたという事実でもある。

また、「教育における価値観というものが、家庭のなかにまで持ち込まれている事態」⁴⁹⁾が、親の空洞化、貧困化を助長させていると高岡は指摘する。これに対し、芹沢は「親も寄る辺ない状況に追い詰められていて、近代がとりあえずつくってきた既成の価値観にすり寄っていくしかない、それにすぎるしかないという、その現状は親子関係を貧しくしてしまっている」と補足している。親自身も子どもをどう育てていいかわからないのである。つまり親自身が人生という長いスパンでどう子どもと接しつづけていくべきか考えあぐねているのだ。そうして現代日本社会が作り出した「よい人生」を押し付ける。

加藤の母は、青森県の名門高校を出ながら進学せずにそのまま金融機関に就職して夫と知り合って結婚した⁵⁰⁾。高岡はここから先は想像が混じることになると前置きしながら、「おそらく母親は、自分が名門高校を出たあと名門大学に進んでいれば人生は違っていたと、考えていたように思います」⁵¹⁾と述べている。だからこそ息子の加藤に北海道大学への進学を言葉に出して要求していたという。加藤はかなり早い段階から母親から「いい子」でいることを求められていた。加藤にとって、「社会的によい生」というのは受動的に与えられたものであった。自分の好きなように生きるのが人生ではなく、社会的によいと決められた人生に忠実にはみ出さないように沿って歩くのが人生だった。「社会的によい生き方」をしなければならないという、半ば強迫観念にも似た義務感をもっていたからこそ、「社会的によくない生き方」をする自分が許せないし、許されない。加藤にとっては「社会的な生死」がそのまま実際の「生死」になった。「孤立」という「社会的な死」に追いつめられた加藤は、自殺未遂、そして無差別殺傷事件を起こす。つまり「孤立」こそが、現代日本社会における自殺の内在的要因である。そして現代日本人は「孤立」にたえられないし、「孤立」する自分を許せない。「孤立」は社会的にみじめで「負け」であると考えている。だから「孤立」は「社会的死」であるのだ。社会的によく生きることが「生」で、社会的によく生きられないことは「死」である。そして100か0しかない二極化した考え方・生き方は「よくない生」を許さない。人生は「よい生」か「よくない生」にわかれる。そして、「よい生」に執着しているため、人生が「よくない生」に転化すると、それはすぐ「死」につながってしまう。「よい生」＝「生」で、「よくない生」＝「死」なのだ。実際の「生」の中に、よい生き方とよくない生き方がある。

49) 芹沢・高岡 2011:124-125

50) 芹沢・高岡 2011:126

51) 芹沢・高岡 2011:127

よくない生は生きているにもかかわらず死んでいる。生の中の死はやがて実際の死に転化する。現代日本人は100か0かの二択ではない「多様な生」を失っているのだ。

3——ディスコミュニケーション

3-1 自己表出と自己表現の狭間で

加藤は「誰か」を求めているが、本人はそれが「誰」なのかはわからなかった。客観的にみれば、それは絶対的に依存できる母親の代わりとしての「誰か」であった。しかし加藤に自分の求めている「誰か」が「母親」だとはわからず、とにかく本来いるべき不在の「誰か」を自分の空洞化した内部に取り戻そうとした。だがそれは行き先のわからない旅のようなものだった。

人生において最初に築くはずの第三者（＝母親）との関係の破綻によって、人間関係の構築がままならない加藤は、「誰か」を求め、インターネットの掲示板に夢中になった。何者かわからない「誰か」は、もはや「誰でもよく」なった。インターネットの世界は「はやい・安い・うまい」といったファストフードのように、手軽で簡単に「誰とでも」つながれた。常に「評価」されつづけることを求めていた彼にとって、自分が書き込みをして、すぐに「レス」がくることは、自分の存在を求められていることと同じ感覚であった。しかし「レス」をもらうためには、自分自身も「書き込み」つづけなくてはならない。彼のインターネットでの書き込み及び人付き合いには「間」がなかった。「間」がないということは、自分の意見に考える時間や責任をもてないことと同じである。そしてそれは人の話を聞く「間」も、許さない。彼は理想の理解者を求め、自分の気持ちを吐き出すだけになってしまった。

芹沢、高岡両氏とも加藤の自己の内面性を言語化できる洞察力を指摘しているし、鴻上尚史⁵²⁾も彼の文章力を買っている。しかし、彼は自己を表出はしていたが、それが表現とまでは至っていなかった。彼のバックボーンを全く知らない第三者に、彼の思考や感情を理解して欲しいならば、彼はもっと長いセンテンスで、前後の脈絡をはっきりさせ、事実関係を補足する必要があった。あまりに唐突に感情を押し付けられても、彼の求める「理解」に達するのは難しい。また逆に彼が表現者として徹したならば、理解者とまではいかなくてもささやかな「ファン」ができたかもしれない。しかし表現として成立するには、彼は自己本位すぎて、他者の入る余裕を作らなかった。自分の表現を他者が共有することも許さなかった。彼は自分が受容されることだけを求め、「誰か」を求めながらも、「誰も」結局は内包する寛容さをもたなかった。

52) 鴻上尚史 (2009) 『「空気」と「世間」』講談社現代新書

3-2 空気をよむ／よませるコミュニケーション⁵³⁾

加藤は「リアル」では行動的で、「ネット」では言語的だった。彼は、母親にそうされたように、人の要求を無言でくみ取って行動で応えていた。また自分の要求も行動で表した。言語表現が乏しかった。しかし「ネット」では、表現ツールが言葉しかないため、饒舌にならざるをえなかった。

加藤は「空気をよみ」、他者にも「空気をよむ」ことを求めた。そして他者をただすときにも「空気をよむ／よませる」コミュニケーション方法で、「手段」として自殺と殺人の「事件」をつかった。鴻上によれば⁵⁴⁾、人と人とのつながりが消えて、何も自分を支えてくれないなかで、「空気をよめ」という昨今よく耳にするフレーズが乱発されているという。言語化されていない意思を「よみ／よませる」ことで壊れかかった共同体の匂いをよんで、かろうじてコミュニケーションが成立するのだ。「空気をよみ／よませる」コミュニケーションが成立する前提として、自分の意思や感情を言語化しないことがあげられる。加藤はまさにそうだったが、彼に対して加藤の母親も行動で意思表示して、加藤にそれを「よませて」いた。そのため加藤も言語による自己表現が未成熟だったのだろう。

加藤は「場の空気、とか、空気をよむといった言葉がありますが、掲示板にも空気があります」⁵⁵⁾ といっている。さらに「掲示板は、文字だけのやり取りです。掲示板をやる人ですら、空気を読み間違えて「空気をよめ」と叩かれることがあ」⁵⁶⁾ るのだという。彼にとって「なりすまし」や「荒らし」は掲示板上的「空気をよめていない」ことと同じだ。

携帯電話や、インターネットの画面上の文字には「肉感」がない。それらの文字は、肉筆ではないため、「相手」の表情を感じることができない。対面してでの会話の場合、耳で言葉を聞くだけではなく、声色、呼吸（つまり「間」と息のあがり方）はもちろんのこと、相手の表情、目の動きなど、意思疎通するために五感すべてを使う。つまり五感すべてで「相手」を感じるのだ。文字上の同じ言葉でも、実際に言葉にするときの言い方で、意味が変わることがある。現代日本人は、五感をすべて使ってコミュニケーションしないために、意思疎通がとれてな

53) 鴻上は「空気をよむ／よませる」行為について、以下のように説明している。『「空気」は目に見えないし、そもそも私たちは「空気」の中にいるのです。それはまるで、自分が出演している映画に、自分で点数をつけるようなものです。客観的に評価できる人はなかなかいないでしょう。映画は普通、自分は出演していないものです。だから、内容を冷静に判断できるのです。(中略)「空気を読め」というのは、自分がまさに出演しながら、その瞬間に、自分が何をすればいいのか、何が間違っているのかを的確に判断しろということなのです』(鴻上 2009 : 4-5)。そして鴻上は『簡潔に言えば、僕は、「空気」とは「世間」が流動化したものと考えています』(鴻上 2009 : 6)

54) 注 52) に同じ

55) 加藤 2013:88

56) 加藤 2013:88

いのである。そして、「空気」を読むことが求められる。感情をぶつけ合うこともなく、「なんとなく」相手の意思をくみ取り、それをすべらないようにうまくかわす。

渡辺よれば、江戸時代の街ゆく人びとは「誰彼となく互いに挨拶を交わし、深々と身がかがめながら口もとにほほえみを絶やさない」⁵⁷⁾。現代日本人は、いくら日本人が礼儀正しいとはいえ、挨拶が希薄になっていることがあきらかである。挨拶が与える効果を考え直すべきである。挨拶やほほえみといったコミュニケーションが、我々の距離を縮めるのである。これもまさに五感を使ったコミュニケーションである。

加藤が感じていた「孤立」は「意思疎通の相違」ないし「ディスコミュニケーション」がもたらしている。「ディスコミュニケーション」が「孤立」を生み出し、ひいては「死」へつながるのである。

3-3 黒か白ではなく玉虫色の日本人

「空気をよむ」というのは昨今よく耳にするようになった言い回しだが、日本人は元来「顔色を窺って」生きてきたのである。欧米人のように「イエス」か「ノー」と返答せずに返事を濁してきた。黒か白ではなく玉虫色なのが日本文化であった。しかし、欧米化やグローバル化によって、「イエス」か「ノー」という二択でのものの考え方、返答を迫られてきた。しかし言葉がそれに追いついていけないのである。「日本語は、(中略)相手との関係が決まらないと発言できない言語」⁵⁸⁾なのだ。相手が尊敬すべき相手なのか、同等なのか、自分より下っ端なのかによって言い方が変わってしまう。英語の“you”も日本語ならば何通りも言い方がある。「この日本語が本来の性能を発揮するには前提がある。それは価値観や、常識といった情報が話し手と聞き手の間で共有されているという前提だ」⁵⁹⁾。現代日本人は、思考だけ欧米化され、言語だけが変わらずに日本式なのである。言葉と行動に隔たりがあることも、加藤のような「孤立」につながるディスコミュニケーションの一因ではないか。なぜこのことが今になって問題になっているかといえば、それはインターネットの普及により、SNS（ソーシャル・ネット・サービス）といった「文字」だけのコミュニケーション・ツールの活用が急速に増えたからである。インターネットは便利で無限の可能性を秘めているようにみえるが、実際には使いこなせていない人も多い。匿名のものと言論の自由が、ときに無責任な言葉の暴力となる。投稿の時間間隔が非常に短いので、自分の考えを推敲することもない。加藤が遭ったように「なりすまし」や「荒らし」などの「ネット」の限界も具体的な形で表出してきている。誤った投稿や悪意の

57) 渡辺 2005:171

58) 鴻上 2009:226

59) 鴻上 2009:228 - 229

ある発言も、インターネット上にデジタル化したデータによって半永久に残されてしまうので、人の噂も七十五日といったように、都合よく忘れ去られることもないと鴻上は指摘する。24 時間いつでも使い放題で区切りがないことが我々をさらにパソコンの前から放さなくする。「昔は、学校でいじめられても、家に帰ればホッとできた。でも、今は、家に帰っても、学校裏サイトにアクセスすると、自分に対する悪口が山ほど書かれている。だから 24 時間、逃げ切れないんです」⁶⁰⁾ という話もある。インターネット社会の出現は、我々がかつてもっていた失われた共同体の歪んだ形での復元である。だが我々が作り出したインターネット社会に、逆に我々自身が飲み込まれてしまっているのだ。

—— おわりに

現代日本社会で急増している、特に若者の自殺の一因は「孤立」である。「空白」つまり「何もない」恐怖を埋めようと、加藤智大はインターネットの掲示板に依存した。しかしインターネットによるコミュニケーションは一方的な「空気をよむ／よませる」コミュニケーション手段であり、「意思疎通の相違」を引き起こす。そしてこの「ディスコミュニケーション」はさらに「孤立」を深める。加藤にとって「孤立」は「社会的な死」であった。加藤にとっては現実的な「死」よりも、社会的な「死」のほうが恐怖であった。また「100 か 0 か」のものの考え方は、「よくない生」を「死」と考える。加藤は「孤立」を回避するために「自殺」という「手段」をおこした。また無差別殺傷事件さえ「手段」としての「事件」であった。この「手段」という考え方も「空気をよむ／よませる」コミュニケーションの延長線上にある。

加藤は「社会との接点」を重要視し、加藤はそれが自殺防止にも、事件防止にもつながると考えている。確かに社会との接点は重要である。それが「孤立」を防ぐといえる。しかし、加藤は生きる理由になる「誰か」を求めていたが、社会との接点となる「誰か」という他者を求め、その他者にばかり期待しすぎていないだろうか。他者は自分の思い通りばかりには動いてくれない。時に期待を裏切り、自分を傷付けることもある。それは自分自身だって同じだ。だから他者に左右されない「自分の仕事」が必要ではないか。「仕事」とは、働いて報酬をもらうことだけをいうのではない。自分の好きなこと、趣味、やりがい、生きがいを含めて指す。他者とのかかわりの中から見出される生きがいも大切だが、自分自身の中に生きがいを見出すことも必要である。つまり、他者と関わりつつ、他者に求めすぎない。まず「自分」があり、それに対して「相手」がいる。そして「相手」にばかり期待するのではなく、「自分」も能動的になる。これは適切な言

60) 鴻上 2009:199 - 200

葉で表すならば、「相互扶助」といえる。江戸時代の庶民の生活を引き合いに出せば、「江戸時代の庶民の生活を満ち足りたものになっているのは、ある共同体に所属することによってもたらされる相互扶助である」⁶¹⁾。また「日本には貧窮などは存在しない、一族とか家族が貧しいものの面倒は見るし、旅先で病み倒れた者は政府が故郷まで送り届ける」⁶²⁾のである。この助け合いは個人主義とは相反したところにあり、まさに「相互秩序」であるといえる。この「相互秩序」こそが「孤立」をふせぎ、「適度な距離感」を保たせる。

「自分」がいて「相手」がいて、その連続で広がっていくものが「社会」と呼べるだろう。いや、「社会」という言葉は、ふさわしくない。自死問題を含め、現代日本が抱える闇は、「社会的問題」ではない。むしろ「文化的問題」といえないか。つまり「内」から生じるものである。身近にあった「人間関係の問題」の歪みが拡大して今のような状態になったともいえる。自死問題の内在的要因は、現代日本の様々な「社会問題」に通じると思われる。

そして、「死」か「生」だけではない「多様な生」が求められるのではないか。失敗してもよい、「よくない生」でもいい、100か0かの二択ではない多様な生き方をするべきだ。そもそも「よい生」とは何か。「よくない生」とは何か。「ゆたかさ」の価値観が、「精神的」ゆたかさから「物質的」ゆたかさになってしまったことは、周知のとおりである。また、「多様な生き方」をするためには、「多様な仕事」も必要だと思う。人は皆同じように生きる必要はない。皆違う生き方をしてよいし、その「差異」を「多様」、つまり「ゆたかさ」ととらえられるようになればいいのではないか。

江戸の人びとの暮らしぶりから考察し、内在的要因に注目するならば、江戸時代的な豊かさを継承できなかった伝統を活かせずに、資本主義的な消費文化に翻弄されてしまっていることが、今日の自死激増に関連しているように思われる。もちろん外在的要因も含めての複合要因だと思われる。渡辺はいう。「重要なのは在りし日のこの国の文明が、人間の生存をできうるかぎり気持ちのよいものにしようとする合意と、それにもとづく工夫によって成り立っているという事実だ。ひと言でいって、それは情愛の深い社会であった。真率な感情を無邪気に、しかも礼節とデリカシーを保ちながら伝えあうことのできる社会だった。当時の人びとに幸福と満足の表情が表れていたのは、故なきことではなかったのである」⁶³⁾。決してノスタルジアにもとづく根拠薄弱な願望ではない。確かにタイムスリップすることはできないが、江戸というひとつの実在した社会のモデルであり、先達たちの生き方の実例だ。

61) 渡辺 2005:158

62) 渡辺 2005:148-149

63) 渡辺 2005:183

現代日本の自死問題の内在的要因は他の社会問題の要因とも通じるところがある。それは根本的な人間関係の構築、コミュニケーションが難しくなっている現代日本人の姿を映し出している。相互的な関係や共同的な営みは、コミュニケーションを通じて安全や安心を作り出し、親和を蓄積していく。しかし同時に、相互のしほりや強制を生じる。近代化はおそらく両者を共に破壊し、自由で孤独で不安な人々が自己努力と自己責任で暮らす社会を生み出したように思える。しかし、自己の努力や責任が及ばないところでは、国家といきなり向き合うことになる。

最近、頻繁に「孤立死」または「孤独死」の事例が報道されている。しかし、「孤立死」の確立した定義はなく、また全国的な統計も存在していないという。東京都監察医務院が公表しているデータによれば、東京都23区内における一人暮らしの65歳以上の自宅での死亡者数は平成14年の1,364人から平成20年には2,211人と1.6倍に増加している。また（独）都市再生機構が運営管理する賃貸住宅約76万戸において、単身の居住者が誰にも看取られることなく賃貸住宅内で死亡したケース（自殺や他殺を除く）は平成11年度の発生件数207人から平成20年度には613人と、9年間で約3倍に増加した。この死亡者数すべてが孤立死であるわけがないが、いわゆる広義の「孤立死」の多くはこのなかに含まれると考えられる。このことから孤立死の数も、おそらく同様に増加しているものと推測される。「孤立死」も自死問題と同じ背景をもち、共通の要因を抱えているのではないだろうか。「孤立死」の問題もこれから我々が考えていくべき問題である。

「江戸時代の後半、人びとの意識は自分の人生と社会ならびに自然との調和的呼応という点では、ある極点に達していたようだ。中世のように死と生を徹底して見据える視線は消失した」⁶⁴⁾。「この時代の人、あるいは死とあまりに親しみすぎていたのかもしれない」^{65) 66)}。「死」や「不幸」は訪れるものであり、彼らにとっては自然現象であったのである。それはどうしようもないことであり、甘受する以外はないものなのだったのではないか。現代では「生」と「死」が断絶している。「現世」しかない。「生」と「死」の連続。「死」が「この世」から「あの世」へのただの移動であるから、当時の人びとは「死」が恐くなかったのかもしれない。「死」を含みながら生きていたのだ。現代日本人は「よい生」に

64) 渡辺 2004:86

65) 渡辺 2004:84

66) 江戸時代には『火事で「焼け出された人々も必ず幸福そうにニコニコしている」』（渡辺 2005:507）。「不幸に襲われたことをいつまでも嘆いて時間を無駄にはしなかった。持物をすべて失ったにもかかわらずである。…日本人の性格中、異彩を放つのが、不幸や廃墟の前にして発揮される勇気と沈着である」（渡辺 2005:507）。「この時代の日本人は死や災害を、今日のわれわれからすれば怪しからぬと見えるほど平然と受けとめ、それを茶化すことさえできる人びとだった」（渡辺 2005:509）。

執着している。「よい生」が叶えられないなら、一気に「よくない生」＝「死」へと転化する。それはゲームのように自分の人生が嫌になったらリセットボタンを押すみたいに。現代人は「人生」をコントロールしようという意識が強すぎるのではないか。「命」のハンドルは自分が握っていると思っているのである。このような折、死んだ祖先や身近な人のことを考えてみたらと思う。

《引用文献》

加藤智大（2012）『解』批評社

加藤智大（2013）『解＋——秋葉原無差別殺傷事件の意味とそこから見えてくる真の事件対策』批評社

芹沢俊介・高岡健（2011）『「孤独」から考える秋葉原無差別殺傷事件』批評社

鴻上尚史（2009）『「空気」と「世間」』講談社現代新書

渡辺京二（2004）『江戸という幻景』弦書房

渡辺京二（2005）『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー

[おおはし なおみ]